11. 高知県立大学県民大学学生プロジェクト「立志社中」「立志のたまご」の採択と活動

1)健援隊プロジェクトの活動

健援隊は、立志社中プロジェクト開始当初から設立され、今年で9年目の活動となる。健援隊の活動目的は、専門知識をわかりやすく地域の方に伝え、知識の普及と健康文化の醸成である。今年度は、看護学部メンバーに新たに、健康栄養学部の学生が加わり29名で活動を行った。

(1)活動目標

①香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上を支援する

②香美市柳瀬地区の災害備蓄品リストの作成を通して防災意識の向上と防災対策の充実を図る

③小児を対象に健康に関する知識の習得をはじめとしたヘルスリテラシーの醸成を支援する

(2)活動内容

①香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上を支援する

神池地区と柳瀬地区は隣接している地区であり、この地区は、病院までの距離が遠いこと、近隣に入院病床がないため、入院が必要になると住み慣れた地区を離れざるを得ないという医療を受ける上での課題があることを捉えた。そこで、地区の方々の「住み慣れた地域で健康に暮らしたい」というニーズに応えられる神池便り・柳瀬便り、健康チェック表の作成と送付を2か月に1回行った。また、今年度は健康栄養学部のメンバーも加わり、旬の食材や栄養に関する情報も紹介し、食事に関する知識の充実を図った。お便りには、私たちの日常の様子も伝えて健康に関する知識だけでなく、健援隊に親しみをもってもらえるよう工夫をした。

②香美市柳瀬地区の災害備蓄品リストの作成を通して防災意識の向上と防災対策の充実を図る

柳瀬地区の住民の方を対象に防災備蓄品の準備状況についてアンケート調査を実施した。その結 果、柳瀬地区は、60～90歳代の住民の方が暮らす地域であり、政府が推奨する防災備蓄品リストには、ライフステージ特有の健康問題に応じた防災備蓄品は示されていないこと、避難所まで距離があり、徒歩での移動が難しいこと、道路環境から災害時も自宅に留まることを選択せざる得ないことがわかった。この結果をふまえて柳瀬地区に現地調査を行い、地区の防災倉庫の点検に参加させていただき、災害時に地区に留まったことも想定して、柳瀬地区の土地の状況や住民の年齢層に応じた防災備蓄品リストの作成に取り組んだ。このほか、アンケート調査で、避難場所について知りたいという住民の方の要望に沿って、現地調査後、避難所の情報について香美市役所防災課の方と意見交換をして、避難所に食料を持参する理由や、移動手段、地区の近隣に避難所を設置することが難しい理由などについて共有して、得た情報を柳瀬地区の方と共有した。

③小児を対象に健康に関する知識の習得をはじめとしたヘルスリテラシーの醸成を支援する

高知市五台山保育園へ事前調査に伺い、園長、保育士、看護師と子どもが楽しく学べる内容について検討した。その中で、子どもは一般的に季節の変わり目に感染症などにかかりやすく、子ども自身が自分の体調の変化に気づき、自分の身体・健康についての関心を高めること、メンバーがもつ食事に関する専門的な知識を活かせる内容として、今年度はバランスのよい栄養と季節の寒暖差の2つのテーマで子どもへの健康推進活動を行った。年長児を対象に、五台山保育園の方のアドバイスを受けながら、目で見てわかるイラストを使用し、子どもが理解できるような簡単で分かりやすく、誤解しない言葉で伝えること、子どもが自分たちでできる健康管理方法について伝え、自分の健康に関心を高められるように工夫した。

(3)活動の評価

①香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上の支援では、住民の方の医療へのアクセス状況、地区の方の年齢層に応じた健康づくりについてメンバー間で検討していく中で、中山間地域の抱える課題、高齢者の健康について学びを深めることができた。

②香美市柳瀬地区の住災害備蓄品リストの作成を通して防災意識の向上と防災対策の充実については、事前調査で住民の方の防災への意識を確認して現地調査に行くという順序を踏んだことで、学生自身が現

地調査の目的を明確にして調査に望むことができた。また、避難所への避難方法、食事の持参について住民の方の気がかりについて香美市市役所防災対策課からも情報を得て住民の方に防災情報を提供することで、住民の方と市役所との橋渡し役も担う機会を得た。
③小児を対象にとした健康に関する知識の習得をはじめとしたヘルスリテラシー醸成の支援では、子どもの健康に関するニーズの把握と、そのニーズにメンバーの専門的知識を活かして健康教育に取り組むことができた。

(4)今後の課題

香美市神池地区、柳瀬地区への交通費、メンバーの授業・実習等によって現地訪問の回数が限られるため、効果的な活動計画と方法について検討しつつ、各メンバーの役割を明確にして地区の方々と学生の効果的な学びの得られる活動を継続していく必要がある。防災備蓄品リストでは、活用状況や使い勝手を地区の方に伺い、評価修正を行い、防災備蓄品リストの質の向上についてもチームで検討する必要がある。小児を対象とした活動では、健康推進活動での子どもの反応等を通してさらに子どもの理解を深め、今後の小児健康推進活動に反映できるようサポートしていく。

2)いけいけサロン活動の活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部4回生12名、3回生1名、2回生6名の計21名で活動する結成8年目のチームである。今年度は、コロナ禍3年目で直接対面しづらい期間が長くなったこともあり、プロジェクトの目的を「距離は離れていても気持ちはつながり、また話したい会いたいと思ってもらえる関係性になり、住民の方々と学生が互いをより近い存在に思う」とした。

(1)活動目標

①非対面の活動でも互いに楽しい、安心できると思えるような活動をする
②池地域の住民の方も学生も無理のない範囲で活動に取り組む
③池地域の住民の方と共に創り上げることを意識して、活動の幅を広げる
④自分が池地域の住民の方だったらと考え、どのような活動が互いにより楽しく、無理のないものか考える。
⑤池地域の住民の方と学生、一人ひとりの存在を大切にする
⑥活動を評価をする際に住民の方々に直接感想をいただいたり、反省会を定期的に行い、多様な視点を持って考える。

(2)活動内容

上記6つの目標の到達に向け、以下の活動に取り組んだ。

①毎月のチラシ配布の継続

池地域35世帯に、町内会と協力して、チラシの配布を行った。令和3年度まで新型コロナウイルスにより、対面活動を制限してきた。その為、住民の方に、学生・大学を身近に感じて頂けるように学生の日常生活の話題についてチラシに掲載した。

②池地域知り直し活動

池地域とはどのような場所なのか知るために、地域に出向いた。この活動で地域を歩いたことによる気付きから、道路や歩道の状態による危険性や日常生活に与える影響について理解した。池地域の特性や課題を発見できたことにより、住民の方々の生活をイメージすることが出来たと捉えている。避難経路や道の状況を実際に見て、道路が舗装されていない場所や負傷者が容易に歩けそうにない道など、災害時に危険となりうる場所を発見することができた。また、この気付きをもとに、災害時に避難場所に持参できる「お守りカード」を作成するきっかけとなった。

池地域での災害発生時に対応出来る防災知識を身につけるために、高知県内で行われた防災訓練を見学し、地震に対しての被害軽減や津波に対する知識を習得した。防災訓練の成果としては、救助に時間を要することなど多くのことを学び、池地域ではどのような災害発生に対する課題があるのかを見つけることができた。

③屋外でのサロン活動

今年度ははじめて屋外「池公園」でのサロン活動を行った。具体的には、敬老の日のプレゼントの手渡

しを行った。この時、初めて住民の方々と対面で交流する機会となり、今までの感謝を直接伝える場にもなった。また、大学祭を機会に住民の方々が大学に足を運ぶきっかけにしたいと思い、住民の方々と一緒に大学祭に参加した。大学祭を終え、住民の方から「外出する自信になった」という意見を頂き、この活動自体がつながりを深めるだけでなく、住民の方々の外出のきっかけにもなっているということを実感できた。その他、三里地域の公園での花壇整備のお手伝いや、オーガニックマーケットでのお手伝いにも取り組んだ。これらの活動からは、若い世代の力や、住民同士のつながりが生活にとって重要であることを学んだ。

④パンフレットの作成

自分たちがみた池地域を、1 冊のパンフレットにまとめ、住民の方々と共有した。ここには、これまでの活動での成果を生かし、災害時に活用できる「お守りカード」や池地域が大切にしているものをモチーフにしたステッカーを作成し、地域の方々を元気にすることにも役立てたように思う。

⑶活動の評価

・目標①と⑤について

昨年度まではチラシの内容を住民の方々が取り組みやすいクイズやゲームにしていたが、今年度はこれらに加えて自分たちが学内ではどのような活動を行っているのかが伝わるように写真を添えて掲載した。12 月に行ったサロン活動では感染予防を考慮し、プレゼントを交換する際は手渡しをしないように、配置したプレゼントを一人ずつ取っていくような形を取った。このような感染対策により住民の方々と距離ができてしまうため、活動拠点に装飾をするなど工夫を施した。また、大学祭に参加した際には立ったままの体勢が負担であると思われる方のために椅子が準備できるように工夫した。

・目標②と④について

活動の頻度を月に 1～2 回にしたり、感染状況をみながら活動のタイミングを工夫した。また、池地域の住民の方々の暮らしを知るための知り直し活動を行ったことで生活をイメージしやすくなり、池地域で暮らす人々にとって災害時の生活拠点が避難場所である池キャンパスになることから、避難場所で自身の情報を速やかに伝達することができる「お守りカード」の作成を行った。これらの目標は達成できたと考える。

・目標③について

「新型コロナウイルスの影響で外出することに抵抗が生まれていたがこの活動に参加したことで外出する自信や人と会うきっかけにつながった」という意見を聞き、活動自体が学生だけでなく住民の方々の生活にも影響を与えており、今後の生活への考え方や外に出てみようかなという勇気にもつながると感じた。敬老の日のプレゼントや年賀状によって日ごろの感謝を伝える活動にも取り組むことができた。

・目標⑥について

新型コロナウイルスの影響で年度末のアンケートを実施できなかったことにより直接感想を伺う機会は少なかった。よって、今後は活動ごとにアンケートを配布するなど工夫をして、住民の方の意見をもっと取り入れられるようにしたいと考えている。

⑷今後の課題

令和 4 年度は 3 年ぶりの対面活動であった。学生は、なんとか住民の方と学生の「つながり」をつくりたいと、感染症対策を十分に行ったうえで、多様な活動を発案し積極的に取り組むことができた。「地域へ入る」ことについて、地域学実習 I で学んだことを生かしつつ、看護を学ぶ学生としての基本的な倫理的行動をとることができるよう、2 回生は 3 回生、4 回生のサポートを受けながら、進めることに取り組んでいた。学生のペースと住民の方の活動ペースが、8 年間かけてそろっていたとはいえ、コロナ禍で活動しづらかった時期の影響を受けているように感じられた。したがって、今後は、学生ができること、住民の方ができることをお互いに理解し合い、このチームと池地域ならではの活動の仕方を再構築し、丁寧に活動できる体制づくりをサポートしたい。そして、お互いにこの活動から学ぶことを持って、それぞれの生活を豊かにできるよう、見守りたいと考える。学生と住民で協働する活動による創造性を存分に発揮できる支援の仕方を模索し、この活動を支援していきたいと考える。